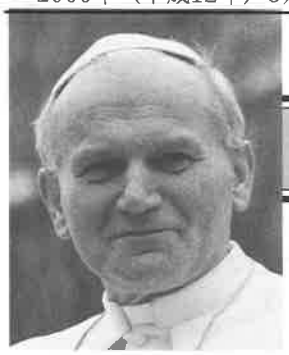
2000年（平成12年）6月10日発行　第242号　（昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可）



教皇様の聲 6 242号

Libreria Editrice Vaticana,Citta del Vaticanoの転載許可済 2000

ペトロの役務

〔聖ペトロの教座の祝日に、教皇庁で働く人々へのお話。〕

1　「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」（マタイ16・18）

巡礼者としてバチカン大聖堂の聖年の扉を通りました。そして今、神のみことばに耳を傾けた私たちは、キリストがペトロに対して、またペトロについて言われたことに注目します。使徒の墓の上にある告白の祭壇に集まっている私たちは、教皇庁として知られる特別な任務を果たす役割を担っています。（…）

教会の土台はペトロの信仰告白

2　「あなたはメシア、生ける神の子です」（マタイ16・16）この言葉は、使徒の王子が告白した信仰です。枢機卿や司教、司祭は、教皇庁に協力する修道者や信徒と共に、今日再びこの言葉を繰り返します。大聖年を祝う今日、特に思いを込めて、使徒のこの明確な言葉を繰り返すのです。

キリストの応えは強く心に響きます。「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。」（マタイ16・18）福音記者ヨハネは、アンドレアが兄弟のシモンをイエスのもとに初めて連れて行った時、イエスがシモンに「ケファ（岩）」という名を与えたことを証言しています。（ヨハネ1・41～42参照）他方、マタイによる福音書は、キリストの救い主としての仕事の中でも最も重要な瞬間、つまり、キリストが教会を建てることに関係づけて、ペトロという名前の意味を説明しています。

「あなたはメシア。」教会はペトロの信仰告白とそれに続くイエスの宣言に基づいています。イエスは続けて言われます。「あなたはペトロ。」悪の力は決してこの不屈の基盤に勝ることはありません。この基盤は、「天の父」（マタイ16・17）のご意志によって守られています。今日祝っているペトロの教座は、「血と肉」を備える人間ではなく、すみ石であるキリストによって保証されています。そしてシモンのように私たちもまた祝福されています。というのも私たちは、永遠の神の意志によるご計画以外に、何も誇るものはないことを知っているからです。

3　「わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。」（エゼキエル34・11）この言葉は、イスラエルの牧者に関する預言者エゼキエルのものでよく知られていますが、今日第一朗読として読まれたこの部分は、「ペトロの役務」が本質的に司牧的なものであることを強く思い出させてくれます。この側面こそ、教皇庁の本質とその奉仕に反映されている点です。教皇庁の仕事は、ペトロの後継者と協力して、羊の世話をするキリストがペトロの後継者に任せた仕事を実行することです。

「わたしは自ら自分の群れを探し出し、憩わせる」（エゼキエル34・11、15）「私は自ら」という言葉は最も重要なものです。というのは、神ご自身が御自ら人々の世話をするという決意がここに現われているからです。私たちは「私は自ら」という言葉が実現したことを知っています。時が満ち、神が良き牧者である御子をおつかわしになった時に実現しました。御子は「主の力、神である主の御名の威厳をもって」（ミカ5・3）羊の群れの世話をします。神は御独り子を、分散した神の子を一つに集めるために世にお送りになり、子羊として、また十字架の祭壇上で罪をあがなう従順ないけにえとして、お渡しになりました。

これこそ牧者の模範です。ペトロや他の使徒たちが、イエスと共に救い主としての使命に参加することによって自覚し、また真似たのはこの牧者という模範なのです。（マルコ3・14～15参照）この点は第二朗読にも表われています。ペトロは自らを「キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者」（1ペトロ5・1）と呼んでいます。牧者ペトロは、イエスという牧者とその過越の秘義によって形成されています。「ペトロの役務」は、ペトロとその後継者が、牧者キリストに一致することによって成長します。またこの一致は、愛の賜物に基づいています。「この人たち以上にわたしを愛しているか。... わたしの子羊を飼いなさい。」（ヨハネ21・15）

受難の前夜

4　今日のような機会に、ペトロの後継者として、最後の晩餐後オリーブの園で起こった受難前の出来事を忘れるわけには行きません。使徒たちは、これか

ら起こることについて何も分かっていないようでしたが、イエスはそのことも承知していました。イエスは、祈りを捧げ、受難を待つためにオリーブの園へ行きました。こうして、ご自分の時、つまり十字架上で死を迎える時を準備なさったのです。

イエスは使徒たちにおっしゃいました。「あなたがたは皆わたしにつまづく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう。』と書いてあるからだ。」（マルコ14・27 ）ペトロは答えます。「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません。」（マルコ14・29）わたしはつまずきません。決してあなたを離れません。しかし、イエスはおっしゃいます。「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」（マルコ14・30）「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」（マルコ14・31）ペトロは激しい調子で答え、他の使徒たちも同じことを言います。イエスは言われます。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」（ルカ22・31～32）

キリストのこの約束によって、私たちは本当に力付けられます。ペトロの役務は人間の力や強さではなく、キリストの祈りに基づくという確信がより確かなものとなるからです。キリストは御父に、シモンの信仰が「なくならないよう」（ルカ22・32）祈ってくださいました。「立ち直った」時、ペトロは兄弟に仕える仕事を果たすことができるでしょう。二度目の改心とも言える使徒の痛悔は、神に仕えるという旅路での決定的な転機となります。

5　(・・・)聖年の扉を通り、大聖年の恵みを受けた私たちは、深い霊的な改心を目指すべきです。ペトロのことは私たちを勇気づけてくれます。ペトロは人間の弱さというものを知ることになります。イエスとの会話の直後、ペトロは固く誓った約束を忘れ、主を拒んだのでした。ペトロの罪と限界にも関わらず、キリストはペトロを選び、最も重要な仕事を託します。教会という目に見える一致の基礎となり、兄弟たちを信仰において強めるという仕事です。

キリストが恩恵を豊かにお与えになりますように

決定的な瞬間が、木曜日と受難の金曜日をはさんだ夜に起こりました。大祭司の家から引き出されたキリストは、まっすぐにペトロをごらんになります。三度キリストを拒んでいたペトロは、そのまなざしに打たれ、すべてを理解するのです。ペトロは主の言葉を思い出します。その言葉は心を貫きます。「そして外に出て、激しく泣いた。」（ルカ22・62）

私たちはペトロの涙に深く動かされ、内的に本当の清めを実現するよう駆り立てられます。「主よ、私から離れてください。私は罪深い者なのです。」（ルカ5・8）ペトロは奇跡的な大漁を見てこう叫びました。皆さん、大聖年を祝う間、ペトロの祈りを自分のものとしましょう。謙遜な心でお願いするのです。キリストは私たちのために数々の不思議を実現なさいます。キリストは癒しの恵みをあふれんばかりに与え、奇跡の大漁を繰り返し、三千年期の教会が使命を果たせるよう約束で満たしてくださることでしょう。

皆さんの祈りによって新しく生まれる教会が第一歩を踏み出す時、幸いなるおとめが共にいてくださり、大聖年の旅路を見守ってくださるでしょう。ペトロのように、私たちもキリストの絶え間ない支えを感じることができますように。栄光の再臨を待つ間、忠実に喜んで福音に仕えるという使命を生きることができるようお助けください。主イエス・キリストは、昨日も今日も永遠に変わらないお方です。

(2000.2.22)

歴史に現われる三位一体の栄光

〔一般謁見での三位一体についてのお話〕

1　今お聞きになったように、この集まりは詩篇135の「偉大なハレルヤ」で始まりました。(・・・)救いの歴史の出来事を通して表される神の愛をたたえて歌われます。特に神はその愛によって、エジプトでの奴隷状態から解放し、約束の国という賜物をお与えになりました。(・・・)神は輝く光の輪に囲まれて黄金の天国に留まっているような冷淡な皇帝ではありません。神はエジプトにいるご自分の民の苦しみをご覧になり、嘆きを聞き、人々を救うためにお降りになりました。（出エジプト3・7～8参照）

御父の強い関心は人間の歴史

2　今からご一緒に、歴史に神が存在なさることについて、三位一体の啓示の光に照らされて考えていきましょう。三位一体の神については、新約聖書で完全に啓示されますが、旧約聖書においてもほのめかされています。御父から始めましょう。御父の姿はかすかに現われています。神の姿が現われたのは、神を優しい愛すべき父として呼び求める義人のために神が歴史に介入された時でした。神は「みなしごの父となり、や

（昭和５９年１０月１日第三種郵便物認可）

もめの訴えを取り上げてくださる。」（詩篇６８・６）ご自分に反抗する人や罪人にとっても神は父親であることに変わりありません。

二つの預言書は、とても美しく素晴らしいものですが、神の独白、「もはや神の子らではない」（申命記３２・５）を記すことによって、人々に対するその繊細な心遣いが示されています。二つの預言書を通して、複雑な人間の歴史においても、神が絶え間なく私たちを愛してくださることがわかります。エレミヤの書で主はこう言われます。「わたしはイスラエルの父 ... エフライムはわたしのかけがえのない息子、喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに、わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り、わたしは彼を憐れまずにはいられない」（エレミヤ31・9、20）ホセアの書でも神の驚くべき告白が見られます。「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。... エフライムの腕を支えて、歩くことを教えたのは、わたしだ。しかし、わたしが彼らをいやしたことを、彼らは知らなかった。わたしは人間の綱、愛のきずなで彼らを導き、彼らの顎から軛を取り去り、身をかがめて食べさせた。... わたしは激しく心を動かされ、憐れみに胸を焼かれる。」（ホセア11・1、3～4、8）

3 これらの聖書の言葉からわかることは、父である神は、私たちに起こる出来事に決して無関心ではないということです。神は、歴史の中心に御独り子を送ることさえなさいました。キリスト自身、ニコデモとお話しになった夜、このように証明されました。「神は独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じるものが一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」（ヨハネ3・16～17）御子は生ける者として、また生命の源として、時間と空間の中にお入りになりましたが、このことで私たちは不節制や浅はかさから救われました。ですから御子が送られたことは、歴史の流れの中でも決定的な意味を持つことです。特に、喜びと悲しみを持つ人間、また善と悪が交錯する歴史は、救いと永遠の生命にあずかるため、十字架のキリストのもとに集められます。「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」（ヨハネ１２・３２）ヘブライ人への手紙は、キリストが歴史の中に絶え間なく存在されることを見事に一文で宣言しています。「イエス・キリストはきのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」（ヘブライ１３・8）

4 一連の出来事の中で隠れていながら大きな影響力を持つこの存在を発見するために、また、今や私たちの真只中にある神の国に気が付くためには（ルカ17・21参照）、歴史的な日付や出来事に表れる表面的なことを見るだけでは不十分です。ここで、聖霊の働きを考える必要が出てくるのです。旧約聖書ではまだ、聖霊についてのはっきりした啓示はないものの、救いに対する積極的なはたらきかけで、聖霊に帰せられた事柄があります。聖霊は、イスラエルの裁判官（士師記3・10参照）とダビデ（1サムエル16・13参照）、メシアである王（イザヤ１１・１～2、４２・１参照）をかりたてます。聖霊が預言者たちに、ご自分の役割についてお示しになります。主のご計画をあらわにし、歴史に隠れる神の栄光と私たちの日常の出来事を明白にしたのです。預言者イザヤは最も効果的な一節を残しています。キリストがナザレの会堂で話された時、この一節が取り上げられました。「主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして、貧しい人に良い知らせを伝えるために。打ち砕かれた心を包み、捕われ人には自由を、つながれている人には解放を告知させるために。主の恵みの年を告げるためである。」（イザヤ61・1～2、ルカ4・18～19）

創造主、三位一体の神

神の霊は、歴史の意味を示すだけでなく、私たちが歴史に含まれている神のご計画に協力できるよう力をお与えになります。御父と御子、聖霊の光のもとで、歴史はいずれ死の淵に消えて行く一連の出来事ではなく、永遠の種が実を結ぶ地、「神がすべてにおいてすべてとなられる」（1コリント15・28）素晴らしい目的地へ通じる道となります。大聖年は「恵みの年」ですが、このことはイザヤによって告げ知らされ、キリストによって実現されます。大聖年は、永遠の種と栄光の現われになるべきです。それによって、神の存在に支えられる全ての人々が、純粋にキリスト教的人間的な新しい世界を望むことができるでしょう。

歴史におられる聖霊のはたらきの神秘にためらう時も、あがむべき素晴らしい聖霊に自分自身を委ねることができますように。神学者であり詩人であるナジアンスの聖グレゴリオが歌っています。「父なる神と全世界の王である御子に栄光を。誉むべき全き聖である聖霊に栄光を。唯一の神である三位一体は全てをお造りになり、全てのものの内においでになります。三位一体は聖霊によって全てのものに生命を与え、全被造物が、知恵である神、生命の唯一の源、被造物の生命を守る神をたたえることができるようになさいました。理性を持つ被造物が、何よりもまず、偉大なる王、善き父として三位一体を祝うことができますように。」（Dogmatic Poem,XXI,Hymnus alias:PG37,510-511）

（2000.2.9）

私の体、私の血

〔聖地巡礼、高間でのごミサ〕

1　「これは私の体である。」

高間に集う私たちは、福音書の最後の晩餐の部分に聞き入りました。この言葉は、御子の受肉という秘義の深みから出てくるものです。イエスはパンを取り、祝福して裂き、弟子に与えて仰せになります。「これは私の体である。」神と民との契約は、永遠のみことばが肉となった御子のいけにえにおいて最高潮に達し、古代の預言が実現するところです。「あなたは、いけにえや捧げ物を望まず、むしろ、私のために、体を備えてくださいました。… 御覧ください。わたしは来ました。神よ、御心を行なうために。」（ヘブライ10・5、7）御父と一つである神の御子は、受肉によって人となり、おとめマリアから体を与えられました。そして、キリストは今、死の前夜、弟子に仰せになります。「これはあなた方に与えられる私の体である。」

二千年間、（・・・）叙階の秘跡によってキリストの司祭職に参与する人々がこの言葉を繰り返してきました。キリストは、世界の隅々で、司祭を通して絶えずこの言葉を語り続けます。

2　「これは私の血の杯。あなたたちと全ての人々の罪を赦す新しい永遠の契約の血である。これを私の記念として行ないなさい。」

キリストの命令に従って、教会はこの言葉を聖体を祝う時に毎日繰り返します。これは、あがないの秘義の深みから出る言葉です。高間で過越しの晩餐を祝う時、イエスはぶどう酒を杯に満たし、祝福して弟子たちにお与えになりました。これは旧約の過越しの式の一部です。しかし、新しい永遠の契約の司祭であるキリストは、これらの言葉を用いて受難と救いの秘義を宣言なさいました。パンとぶどう酒の外観のもとに、御体と御血のいけにえの秘跡的なしるしを制定なさったのです。

「十字架と復活によって、私たちを解放してくださいました。あなたは世の救い主です。」この「信仰の神秘」は二千年の間、教会を養い支えてきました。世の迫害と神の慰めの真只中で巡礼を続ける教会は、キリストが再び来られるまで主の十字架と死を宣言します。（「教会憲章」8番参照）（・・・）

3　（・・・）

「パンを裂くこと。」聖体は、新しい永遠の契約における一致の祝宴であり、十字架の救いの力を表すいけにえでもあります。そして最初の最初から、聖体の秘跡は使徒の教えと相互の交わりに常につながっています。また、かつては預言者を通して語られ、今はイエス・キリストが話された神の言葉ともつながっています。（ヘブライ1・1～2参照）（・・・）

4　諸国の使徒である聖パウロがはっきりと理解していることは、聖体拝領が、キリストの御体と御血にあずかるだけでなく、教会における霊的な一致の交わりの秘義でもあるということです。「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。」（1　コリント10・17）良き牧者であるキリストは、羊たちに自らの生命を与えましたが、聖体のかたちで、教会に現存しておられます。一つのパンと一つの杯にあずかる全ての者のうちにキリストが秘跡的にいらっしゃらないとしたら、聖体とは一体何でしょうか。この現存は教会の最も貴重な財産です。

聖体を通して、キリストは教会を築きます。最後の晩餐で弟子たちのためにパンを裂いた御手は、十字架上で広げられることになりますが、それは全ての人を御父の永遠の国へ集めるためです。聖体を祝うことを通して、キリストは人々を引き寄せ、教会の本当の肢体であるようお助けになります。

5　（・・・）新しい永遠の契約の司祭であるイエス・キリストは、ご自分の血によって世をあがなってくださいました。死から復活したキリストは、私たちの場所を用意するため、御父の家に行かれました。私たちを神に愛される子としてくださった聖霊において、また、キリストの御体と一致して、喜びに満ちた希望を持ってキリストが来られるのを待っています。（・・・）

エルサレムの高間で聖体を祝う時、私たちはあらゆる時と場所の教会と一致することとなります。頭であるキリストと一致して、ペトロと使徒たち、何年もさかのぼる後継者たちとも一致します。マリアと聖人や殉教者、聖霊の栄光のもとで生きた全てのキリスト者と一致して叫びます。「主イエス、来てください。」（黙示録22・17参照）私たちとあなたがお選びになる全ての人を、恩恵に満ちるあなたの永遠の国へ連れて行ってください。アーメン。

（2000.3.23）

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■**定価**：送料とも一部186円　■**年内定期購読**：送料とも一部2,087円（税込）
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。
財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920
FAX. 0797-34-4920振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会
＊電話受付時間は火･木曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00となっています。

キリストの昇天

［『カトリック教会のカテキズム』より（試訳）］

「天に昇りて、全能の父である神の右に座す」

659「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた」（マルコ１６・９）。キリストの体は、復活の瞬間から栄光の体となり、その時から永遠に新しい超自然の特性をもつようになった（ルカ24・31；ヨハネ20・19、26参照）。しかし、４０日の間主は弟子たちと親しく飲んだり食べたりされ（使徒行録10・41参照）、また彼らに神の国について教えられたが、この間その栄光は普通の人間性の特性の裏にまだ隠れていた（マルコ16・12；ルカ24・15；ヨハネ20・14-15；21・4参照）。復活後のイエスの出現は、人間性をもったまま神の栄光の中に最終的に入ることで幕を閉じる。その神の栄光は、雲（使徒行録1・9；ルカ9・34-35；出エジプト13・22参照）と天（ルカ２４・５１参照）によって象徴されており、天において主は永遠に神の右に座しておられる（マルコ16・19；使徒行録2・33；7・56；詩篇110・1参照）。全くの例外としてただ一度だけ、「月足らずで生まれた者」（1コリント15・8）のようにパウロにお現れになり、彼に使徒の使命をお与えになった（コリント9・1；ガラチア1・16参照）。

660復活後の栄光が隠されているということは、「わたしはまだ父のもとへ上っていない。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であるあなたがたの神である方のところへわたしは上る』」（ヨハネ20・17）というマグダラのマリアへの神秘的な言葉に浮き彫りにされている。この言葉は、復活したキリストの栄光と、父の右に上げられたキリストの栄光とでは、その現れ方が違うことを示している。昇天という歴史的であると同時に時間を超えた事件は、前者から後者への移行という区切りをなす。

661このキリストの生涯の最後の段階は、最初の段階、すなわち託身によって実現された天からの降下と密接な関係にある。「父のもとから出た」お方のみが、「父のものに行く」（ヨハネ16・28参照）ことができた。「天から下って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない」（ヨハネ3・13、エフェソ4・8-10参照）。人間は、自力のみにたよるなら、「父の家」（ヨハネ14・2）に近づくことはできず、それゆえ、神の生命と幸福を得ることはできない。キリストだけが、人間にこの道を開くことができ、「わたしたちの頭として、先に天に昇り、わたしたちが続いてその国に入ることを熱望しつつこの世の生活を送るようにしてくださいました」（昇天の叙唱。試訳）。

662「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもと引き寄せよう」（ヨハネ12・32）。十字架に上げられることは、天に上げられることを意味し予告する。それは、昇天の始まりである。新約の唯一で永遠の司祭であるイエス・キリストは、「人間の手で造られた聖所にではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださった」（ヘブライ9・24）。天においてキリストは、永遠にご自分の司祭職を果される。「この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人達を完全に救うことがおできになります」（ヘブライ7・25）。「将来の恵みの大司祭」（ヘブライ9・11）として、キリストは天で御父を礼拝する典礼の中心であり、第一の執行者である（黙示録4・6-11参照）。

663キリストはそのとき以来、父の右に座しておられる。「父の右とは神の栄光と名誉である、と理解できる。そこで、永遠の昔から神の子として、御父と同質の神として存在しておられたお方が、人となりその体に栄光を帯びてから、肉体をもって座しておられるのである」（ダマスコの聖ヨハネ，De fide orthodoxa,4,2）。

664父の右に座すとは「（人の子は）権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆彼に仕え、彼の支配はとこしえに続き、その統治は滅びることがない」という人の子についてのダニエルの預言（7・14）の成就であり、メシアの王国が始まったということを意味する。この時から、使徒たちは「終わりのない王国」（ニケア・コンスタンチノープル信経）の証人となった。　（665～667省略）

「かしこより生ける人と死せる人を裁かんために来り給う」

I　栄光の再臨

キリストは教会を通してすでに統治している

668「キリストが死にそして生き返ったのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです」（ローマ14・9）。キリストの昇天は、主が人間として神ご自身の力と権威にあずかったことを意味する。イエス・キリストは、天と地においてあらゆる権力をもつ主である。イエスは、御父が「すべてのものをキリストの足の下に従わせた」がゆえに、「すべての支配、権威、勢力、主権の上に」おられる（エフェソ1・20-22）。キリストは宇宙の主であり（エフェソ

4・10；コリント15・24.27-28)、歴史の主である。人類のすべての歴史と全被造界さえ、彼の中にひとつにまとめられ(エフェソ1・10参照)、完成されるのである。

669 キリストは主であるがゆえに、彼の神秘体である教会のかしらでもある（エフェソ1・22参照）。天に上げられて栄光を受け、かくてご自身の使命を全うされた後も、この地上の教会にお残りになる。贖いの業は、キリストが聖霊の力によって教会の上にふるう権威の源である（エフェソ4・11-13参照）。「教会、すなわち、秘義としてすでに現存するキリストの国は」、「この国の地上における芽生えと開始となっている」（教会憲章3、5）。

670 キリストの昇天をもって、神のご計画は最終段階に入った。我々は「終わりの時」（1ヨハネ1・18；1ペトロ4・7参照）にいる。「すでに世々の終わりは我々のもとに到来しており、世の一新は取り消し得ないものとして決定され、ある意味で、現世において、前もって行われている。事実、教会はすでに地上において、不完全ではあるが、真の聖性によって飾られている」（教会憲章48）。キリストの王国は、教会の宣教に伴う不思議なしるし(マルコ16・17-18.20参照)によってすでにその現存を表している。

すべてが彼に服する時を待ちながら・・

671 キリストの王国は、その教会にすでに現存しているが、しかしながらまだ完成されたわけではなく、「大いなる力と栄光を帯びて」（ルカ21・27；マテオ25・31参照）王がこの地上に来臨されるのを待っている。悪の権力はキリストの受難によってその根本において打ち負かされたとはいえ、キリストの王国はまだこの悪の権力の攻撃(2テサロニケ2・7参照)にされされている。すべてが御子に服従するとき(1コリント15・28参照）まで、「義が定住する新しい天と新しい地が実現するまで、旅する教会は、現世に属するその諸秘跡と制度の中に、過ぎ去るこの世のすがたを示し、今日に至るまで陣痛の嘆きと苦しみの中で神の子らの現れを待ち望む被造物の間に住んでいる」（教会憲章48）。このために、キリスト信者は、特に聖体において、「主キリストよ。来給まえ」（1コリント16・22；黙示録22・17-20参照）と祈願し、キリストの再臨が早められることを祈るのである（2ペトロ3・11-12参照）。

672 キリストは御昇天の前に、イスラエルが待ち焦がれていたメシアの王国の栄光ある設立の時はまだ来ていないと言われた(使徒行録1・6-7参照)。その王国は、預言者たちによれば(イザヤ11・1-9参照)、全人類に正義と愛と平和の秩序を最終的に打ち立てるものであった。主によれば、現在の時は、聖霊の力によって弟子たちがあかしに励む時であるが(使徒行録1・8参照)、まだ「困難」（1コリント7・26）と悪の試練から免れていない時でもある。教会もそれらの試練から自由ではなく（ペトロ4・17参照）、最後の時の戦いが繰り広げられている(1ヨハネ2・18；4・3；1ティモテオ4・1参照)。それは希望と警戒の時である（マテオ25・1-13；マルコ13・33-37参照）。

イスラエルの希望、キリストの栄光の来臨

673 御昇天の後、栄光のキリストの来臨は目前に迫った（黙示録22・20）。とは言え、「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期」（使徒行録1・7；マルコ13・32参照）は我々の知るところではない。この終末の事件はいつ起こるか分からない（マテオ24・44；1テサロニケ5・2参照）。世の終わりとそれに先立つ最後の試練は神の御手の中にある（2テサロニケ2・3-12参照）。　（674～677省略）

II　生者と死者を裁かんために

678 預言者たち（ダニエル7・10；ヨエル3・4；マラキア3・19参照）や洗者ヨハネ（マテオ3・7-12参照）に続いて、イエスも最後の日の審判について説教した。その日には、一人一人の行い（マルコ12・38-40参照）と心の秘密（ルカ12・1-3；ヨハネ3・20-21；ローマ2・16；1コリント4・5参照）があらわにされるであろう。その日には、神の恵みを知りながら無視した者の不信仰が断罪されるであろう（マテオ11・20-24；12・41-42参照）。隣人に示した態度によって、神の恩恵と愛を受け入れたのか拒絶したのかが明らかになるであろう（マテオ5・22；7・1-5参照）。イエスは、最後の日に言うであろう、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたのである」（マテオ25・40）と。

679 キリストは永遠の命の主である。人間の行いと思いを最終的に裁く完全な権利は、この世の贖い主であるキリストに属する。主はこの権利を十字架によって「得た」。御父も「裁きは一切子に任せておられる」（ヨハネ5・22；ヨハネ5・27；マテオ25・31；使徒行録10・42；17・31；2ティモテオ4・1参照）。しかし、御子は、裁くためではなく救うために（ヨハネ3・17参照）、ご自分がもつ命を与えるために（ヨハネ5・26参照）この世に来られたのではなかったか。人は、この世で神の恩恵を否むことで、自分自身をすでに裁いている（ヨハネ3・18；12・48参照）。人は、自分の行いにしたがって報いを受け（1コリント3・12-15参照）、愛の霊を拒否するとき永遠に罰せられる可能性もあるのである（マテオ12・32；ヘブライ6・4-6；10・26-31参照）。